

県医活動報告

平成24年度 女性医師支援事業連絡協議会

日時：平成25年2月22日(金) 14時～16時30分

場所：日本医師会館 大講堂

報告：常任理事 三倉 剛

次 第

司会：常任理事 小森 貴

開 会
挨拶
議 事

女性医師支援センター センター長 羽生田 俊

1. 女性医師支援センター事業ブロック別会議 開催報告(各ブロック15分)
(各ブロック会議の総括や特徴的、先進的な取り組みの紹介)

(ブロック)	(発表医師会)
①北海道・東北	北海道医師会
②関東甲信越・東京	群馬県医師会
③中部	富山県医師会, 石川県医師会, 福井県医師会
④近畿	大阪府医師会
⑤中国四国	徳島県医師会
⑥九州	沖縄県医師会

2. 質疑応答・総合討論

閉 会

担当小森常任理事の司会挨拶, 羽生田副会長の挨拶あり。

まずいつものように先進県医師会からの事例発表が最初にあった。8道・府・県医師会から8つの事例発表があり, 最後に30分ほどの総合討論でしめくくった。

大分県医師会の女性医師支援事業に関する現状は以下の通りである。『大分県医師会男女共同参画委員会(旧大分県女性医師の会)』を中心に, 本年度は女性医師支援のための病院環境整備状況(院内保育所の整備状況等)に関するアンケート調査を行い公表準備中である。また, これまで大分大学と共同で女性医師支援シンポジウムを行ったり, 講演会を開催している。

今回の各県事例発表では育児サポート事業が全国に広がりを見せている点が注目された。本県もこうした動きに合わせて事業展開することが必要である。ただし各県とも対象となる女性医師バンクの活用や育児サポートの活用の広がりはまだ少なく、また女子医学生・研修医等を講演会・シンポジウムに参加させること(人数集め)にも苦勞しているようだ。当県も例外ではない。まして、対象枠を広げて男子学生・男性医師に参加してもらうことは一層困難を極めていた。開催を学生の参加しやすい日時(平日の方が参加しやすい)にすること、地域医療学等の医師確保に熱心な教室の講義枠や単位取得を利用すること、そして先輩・同僚等の口コミ強化が有効とのことであった。また女子医学生達が自分たちで企画運営するのが一番効率的で有効であり、その動きが広がっている。

今回注目された保育サポーター事業について詳述する。山口県医師会が先鞭をつけた保育サポーター事業(平成22年度に発表)が北海道や群馬県などに広がりを見せていた。群馬県医師会の保育サポーター事業は多職種に対してサポートする民間事業者への委託ではなく、女性医師を専門にサポートする自前の保育サポーターを確保している点が特徴である。一人の女性医師を数名のサポーターがチームで支援する体制をとっている。実際開業する女性医師をサポートする姿がTV番組で取り上げられていて、今回それが上映された。子供の発熱時にも対応して受診まで担当していた。今のところ特に大きなトラブルはないという。子供、サポーター双方に保険をかけてリスクヘッジしている。また県医師会内部に保育サポーターバンク運営委員会をもうけ、行政からの委員も組み入れている。同事業の運営には年間800万円ほどかかるが、今回は地域医療再生基金を利用した。継続するにはそうした資金の出処(県予算ほか)を探さねばならない。保育サポーターバンク運営委員会内部に行政側の委員を入れているのはそうした含みもあるという。

本県としても、女性医師支援のための病院環境整備状況の公表の次のステップとして、こうした個別サポートの事業も考える時期に来ているといえる。

